◈カラー版・日本伝奇名作全集◈

柳生武芸帳(全)

五味康祐

カラー版■日本伝奇名作全集12

柳生武芸帳（全）　定価　七二〇円

昭和四十五年四月十五日　初版印刷
昭和四十五年四月二十五日　初版発行　検印廃止

著者　五味康祐
発行者　遠藤左介
印刷　大日本印刷株式会社
製本　小泉製本株式会社
発行所　主婦と生活社内　番町書房

東京都中央区京橋三ノ五　〒一〇四　©一九七〇
TEL(五六七)〇三一一(代)　振替東京一五八四四

0393-720620-6959

目次

柳生武芸帳……三～六四

対談　五味康祐

略年譜　山田宗睦

編集部編

装幀　上口睦人

装画　辰巳四郎

挿絵　矢野徳

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

柳生武芸帳

陰流

唐津藩主寺沢堅高が自殺する六日前に、所定の刻限を俟って大広間に姿を見せると居並ぶ者は顔色を引緊めた。堅高は三十九歳。唐津八万石寺沢志摩守広高の二男で、六日後に自刃すべきか否かがこれからの評定できまる。きめるのは武芸者山田浮月斎である。その浮月斎が、堅高の上座に向かって、既に広間の中央に端坐して静かに瞑目している。白い髯と、銀髪が房々肩に垂れている。もう小半刻、彼はそうして静坐した儘である。定刻前に前後して評定所に這入って来た家臣らは、いずれも、浮月斎のそんな容姿に思わず目を伏せ、沈痛の色を泛べた。主君の運命が早や決せられたと見たのである。——啻、それなら何ういう理由でか？　浮月斎は如何なる根拠を以て主君に死を迫るのか、それが知り度い。一様に言葉にこそ出さないが、主君堅高の死の如何に依っては殉死して後を追わねばならぬ。それで、上座から順次所定の席に着きながら、各自斉しく声を嚥んで、堅高の来場を待つあいだ隣りと私語する者もなかった。中には、黙って浮月斎の横顔を熟視している家臣もあった。

堅高の自殺は、表向きは島原の乱の責を蒙って、地領四万石を召放された事が理由になっている。父・志摩守広高に受け継いだ本領を失って面目なく、且つそれを口惜しんで死んだというのである。併し、四万石の所領を召上げられたのは既に十年前である。もともと唐津城主寺沢氏の本領は、豊臣秀吉が征韓の軍の折、領内、名護屋の地に本陣を布いたので、それ迄の米奉行六万石から八万石に加封された。ついで秀吉薨じて後、関ヶ原の役に寺沢藩は徳川方に与して功績があったので、其の勧賞に肥後の国天草四万石を加えられ、併せて十二万石の大名となった。寛永十年四月十一日に志摩守広高は卒し、嫡子刑部少輔忠清は父に先立って逝っていたから、次男の堅高が家を継いだのである。当時堅高は兵庫頭に任じられ二十五歳である。

寛永十四年島原の乱が起こった時、堅高は身命を抛って力戦した。領地内に変事が起こったのは政道の至らぬ故で当然死罪になる処を、その功で罪を減じられ、四万石の削除で済んだ。謂わば、だから自殺する程の事はなかったわけだった。然も封を削られて十年を経過した正保四年十一月十三日の今、堅高の生死は一兵法者の手中に委ねられている——

太刀持ちの小姓を従えて堅高が正面の座に着くと、広間の左右に居並んだ家臣は一斉に頭を垂れた。常と異なって、容易に誰もあげる者がない。それと見た堅高の片眉がピクリと動いたが、落着いた語調で、

「一同、大儀であるぞ。——始めて呉れい」

対面の浮月斎へは殊更視線を避けて、左右の重臣をかえり見た。この評定の密命を受け、ひそかに江戸表から駈けつけた老臣もある。それで大儀と言ったのである。

「然らば浮月斎——」

家臣の上座にある家老・平野内記が強い眼差で膝を向けた。

「其許の意見、これにて申し述べられ度い」

浮月斎は六十二歳の老齢で、先君志摩守広高が終身、師の礼

をとった剣術者である。広高が卒してからは、師範の役目を辞して作礼山に隠棲していた。家老平野の声に、重い瞼を初めて薄目にあけた。堅高以下一同の視線がその面上に集注した。

「されば申上げる」

浮月斎は堅高を見た。「事茲に至っては、無念乍ら殿の御自害あるのみじゃ」

「予は敢て死は怖れぬぞ。併し、わけを申せ」

「人為のきわまる所にござる」

「人為？」

「されば、今、人城に登り、山に上りて人を見おろすは、人怨みとがめず。大家二階三階を作りて登れば、人是を咎め悪む。人も亦智にほこり才を以て秀るものは人忌み憎む。位高く徳あるものは怨み咎めず。是自然にして作り事にあらず高きを忘るるが故でござろうか。――徳川内府の将軍は自然なれども、石田三成が秀吉公の故智にならわんと為せしは、人為。天下の大勢遂にこの理を出でざれば、殿が御企みも人為を出でず、と申上げるのじゃ」

「待たれい」

家老の次席、池田三郎兵衛が不意に言葉を挟んだ。寺沢藩きっての勇将と謳われた池田市郎兵衛隆成の嫡男で、これはまだ二十七歳の血気盛りである。

「殿の御企みと申されたが、何を以て、左様の企みありとお手前は判断召される？」

「儂が致すのではない。公儀に於て、企みありと見破ったのじゃ」

「な、何と……？」

「此処は九州の辺陬、よも江戸表へ洩れは致すまいと思うは武略の何たるかを知らぬ軽率。公儀に隠密あり、諸藩に日付あり、策謀は手に取る如く幕府が耳目に」

「待て浮月斎」

堅高が青ざめた頬に、無理に笑いをうかべて言った。

「如何にも、企むところ無かったとは申さぬ。併し我らとて、公儀日付の何たるかは存じておるぞ。軽々に意図を察知される言動は取った覚えもない。それが、江戸表に知れているとは不思議じゃ。又、当城下を離れ、作礼山の奥深く棲む筈の其方迄が知っているとは、愈々もって納得が参らぬ」

「殿。某は疋田陰流の衣鉢を継ぐ者、公儀には同じ陰の流れをくむ柳生者が居りまする」

「如何にも柳生は新陰流じゃ。それが予の企みに何の関わりがある？」

「まだお分かりにならぬか、柳生の正体――」浮月斎は底光りのある眼で上段の堅高を見、ジロリと左右を見眄して、

「されば申上げよう」

膝前の鉄扇を取直すと、ひと膝進み出て、一同の想像だにしなかった柳生流の正体を暴露した。

浮月斎山田太右衛門は自ら名乗った如く疋田文五郎の直弟子である。従って柳生石舟斎宗厳とは兄弟弟子に当る。新陰流の始祖上泉伊勢守が柳生に立寄った時、当時中条流の達人と称された宗厳は、伊勢守信綱の甥疋田文五郎と立合って三度敗れ

た。以来信綱を柳生の庄にとどめ、信綱、文五郎の両人に就いて修行をした。その後、文五郎の方は間もなく上泉信綱と別れて単身修行の旅に出、天正年間丹後に到って、当時宮津城主だった細川幽斎に仕えた。のち、天正十七年に関白秀次の師範となったが、文禄四年五十九歳余りで剃髪して栖雲斎と号し、再び諸国漫遊の旅に出た。そうして七年後の慶長六年四月十八日、豊前中津城に旧主細川忠興を訪うて兵法を講述して百五十石、後三百五十石を以て仕え、門下に上野左馬之助を出した。

其の後復仕えを辞して九州各地を廻り、肥前唐津に足を留めた時に教えたのが、山田浮月斎である。浮月斎は其の頃寺沢志摩守広高の小姓である。

主君広高は織田信長の賤臣より身を興した。いかにも戦国の武将らしい大名で、毎日寅ノ刻（四時）に起き、食前には必ず馬をせめた。肥前唐津は麦作の多い土地なので五、六月には家中の者を麦飯とし、自らも麦のみを食したといわれる。衣服は常に木綿を着て刀槍の稽古の間は一汁一菜、終生茶の湯や連歌は好まなかった。そういう武将だったから、浮月斎が修行ののち抜群の技倆を身につけると、憚る処なく師として遇したのである。

藩主がこの様だから、家中の誰彼も、当初は一介の小姓如きにと不満を鳴らす向きもあったが、次第に山田太右衛門に師事するようになった。尤も、これには唐津藩随一の勇将池田市郎兵衛の心酔も与って力があった。

市郎兵衛は首供養をした程の武功者である。広高は茶の代として四百石の所得ある一村を与え、使の用として鉄砲足軽二十人を附けた。或時、市郎兵衛の勇名に惚れて他藩から三千石を以て招いた事がある。市郎兵衛は一顧も与えなかった。それで、広高は「我も三千石を与えずば道に背こう」と新たに禄を加えると、市郎兵衛は辞して言った。「拙者は禄の如何で君に仕える者ではござらぬ。一村にて衣食の温飽には事欠かず、もし武功を以て論じ給わんか、憚り乍ら御家老平野氏の八千石を頂戴致すとも、又、一万石を賜るとも充分ではござるまい」と呵々哄笑した。

こういう人物だから生涯に逸事が多いが、或時、戦いに敗れて退く折、田の畔に味方の侍が腰をすえ、重手に悩んで市郎兵衛を見て助けを求めた。市郎兵衛は馬より降り、手負を抱き乗せ、自ら馬の口を把って退いた。途中、敵両三名がバラバラと追い掛けて来るのを、振返って片手で二人を突き払い一人を田楽刺しにして遂に脱出した事がある。助けられた侍も武辺に名のある人物だったから、後に黒田長政に仕えたが、一夜の雑談に右の事を語ると、長政は話を忘れず、寺沢広高の屋敷を訪ねた時にこの話を持出した。そこで広高は早速市郎兵衛を呼んで讃称したところ、彼は意外にも顔を赧らめ、こう言ったのである。「あの時は、助けて呉れと言われ実は心中に驚き候。凡そ敗戦には身一つだに落つるは容易の事に候わず。捨殺しに致さんと存じ候えども、殿するもの我のみならず、もし他人ありて後に来たり、此の者を助け候わば、我が男が立たずと存じ、思い返して是非なく、――左様、是非なく助け候」聞いて広高も長政も腹蔵なき事に一そう感歎したが、とくに長政は、「潔白ナルコト雷雨に洗ワレタル瑯玕ノ憂然ト鳴ルガゴトシ」

と称揚した。のちに、席を退出した市郎兵衛をとらえて、あまりといえば有りの儘なる言い様をするものかな、と人が言うと、彼は黒々と毛の生えた胸を叩いて示し、

「某は表裏ある言行をなすまじとこの胸に誓うたのじゃ。誓わせてくれたは誰あろう、山田太右衛門じゃ」

と言ったという。

これ程の勇士から信頼された浮月斎である。作礼山に隠棲しても、藩主堅高の生死に関わる大切の場合に、天下の趨勢を睨んで家臣一同へ否応のない評定の断を下し得るのである。

ところが浮月斎の暴露した柳生流の正体だが、

「他でもない、柳生は忍びの術が本体じゃ」

と言うのだ。

「忍び？――」

一同は呆気にとられる。かりそめにも将軍家兵法指南たる柳生流が、下賤の術と蔑まれる忍術なぞとは。「浮月斎どの、如何に公儀に内密の此の場所とて、ちと言葉が過ぎましょうぞ。それとも殿御自害の予測に、気でも触れられたか」

血気にまかせて三郎兵衛が青ざめ乍ら扇子でトトンと畳を敲いた。柳生は天下の大目付である。即ち老中の耳目となり諸大名を監察する。一方忍者は、伊賀者、甲賀者と呼ばれ、戦国の世にこそ、間者や刺客として珍重されたが、泰平の世となった今は、『間者として役立った』その事によって人々に嫌悪され蔑視される。正々堂々と戦う彼らでない事、今日は甲の大名に附き、明日は背いて乙の武将の利の為に働くそういう在り方が、武士道の潔癖の前で嫌悪されるのは自然の情である。『大目付という役名』で諸藩の上にある柳生が、だから若し寔に忍者だというなら、藩政を監視される諸藩は挙って騒ぎ立て、屈辱感と臍りで幕府の要職を詰るにちがいない。結果、どの様な事態にいたるやも知れないのである。政道に術策を弄するのは為政者の勝手である。併し術策が武士らしい腹芸によるか、忍者を使った卑劣の手段に拠ったかは、策に陥った者の肚の斂まり方が違う。

三郎兵衛をはじめ、家臣が一様に殺気立ったのも無理はなかった。

――が、浮月斎はあわてない。静かに堅高を見詰めて、堅高の顔色が次第に紙の様に白くなると、

「御不審は御尤もじゃ。されば、これより柳生流が忍術である証拠を挙げよう」

独り沈思するものの如く一瞬、目を瞑じてから、語り出した。

――先ず柳生の出生である。柳生一族は代々大和国添上郡柳生ノ庄に住んで姓を「柳生」と名乗った。往古は春日神社の神職の出であった。然るに柳生ノ庄は、甲賀と伊賀の両郡に挟まれた山間の地である。甲賀、伊賀には古くより忍びの術が発祥した。柳生ノ庄に育った若者が、日常に忍者の修行や術を見ぬわけがあろうか。見れば真似ぬ道理がない。確かに石舟斎宗厳の曽祖父・柳生光家は間諜として細川高国に仕え、高国没落後は柳生ノ庄に還り住んで、一夜、伊賀者に暗殺されている。宗厳自身は、豊臣秀吉の時、隠し田の科に処せられ累代の地を没

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

収されて、子の宗矩と同じく流浪したが、慶長五年、関ヶ原の役に先立って石田三成が家康を刺そうとしたのを、家康の召しを受け、兵法の奥儀を教える為と称して七日間伏見城に籠って、刺客から家康を護り了せた。その功で家康に仕えたのである。而して宗矩とともに上方軍の情況を調べ江戸に報じている。

ところで三成が伏見城へ差向けた刺客は当然忍び者である。武芸者に、忍者を相手として主君を護りおおせるであろうか。一介の武芸者に、上方軍の情況が間者の如く調べ得るであろうか。否、兵法者なら、そういう賤業に就くであろうか？

即ち、柳生宗厳父子は忍び者だったのである。

次に、島原の乱が起こった時、之が江戸に聞こえたのは十月十日だった。但馬守宗矩は此の日有馬玄蕃頭豊氏の家に散楽を見に行っていたが、そこへ家来が来て島原に乱があり、其の追討使として板倉内膳正重昌が既に出発したと報じた。すると宗矩は急いで自宅に帰らねばならぬと告げて、良馬を借り、品川に馳附けて板倉を問えば、遥かに過ぎたという。更に川崎に行って聞けば今は二、三里も隔たったという。早や日も暮れかかっていたので其の日は引返して登城し、家光に、内膳正が追討の御使を承って出発したというから、上の仰せと称して押留めようとしたが、追いつけなかった、内膳正は討死致しましょう、惜しい武士を殺しましたと言った。

家光がこれを聞き咎めて理由を糺すと、宗矩は答えた。凡愚の土民でも宗門を深く信ずれば却って死を悦びとする、故に此度の切支丹宗徒の乱は、土民が皆勇士と化して居る、然るに内膳正は器量があっても未だ位も低く、禄も少なく又年も若いから、九州の諸大名が快く其の下知に従わぬは必定、従って必ず攻めあぐむであろう、其の時は更に名誉の大名が追討の御使を命ぜられる事になろう、然れば内膳正は面目を失い、必ず自ら討って出て命を捨てるであろう、惜しい人物を失い、且つ御家の恥にもなる事だから、追附いて連れ帰るつもりであったと答えた所、果して宗矩の言った如くになったという話が、「宗矩の先見の明」を讃える意味で普く喧伝されている。

だが、宗矩が『柳生の忍び者』なら、配下を全国に散らして常時、諸国の情勢を窺い知るに、さしたる手間ひまは要らぬ。島原に擾乱のある事は夙に察知していたであろう。その抵抗の只ならぬ事も予知していたろう。それでいて、事のおこる迄素知らぬ態をよそおい、泰平の世に馴れた諸大名に武事の必要を覚らせた。言えば、武芸の株を上げたのである。剰え、自らの術策を飽迄武術の上の明察と世間に見せ、以て柳生流を狂信せしめた。何という謀略。――だが、忍術を秘し、兵法者と見せかけること、コレまことの変幻の術である。次に、陰流の呼称について浮月斎は説く。何故『陰の流れ』と謂うか？　世に陰流は愛洲移香に興り、上泉信綱この刀術に工夫をこらしてあらたに新陰流を称えたという。然るに柳生新陰の太刀に「山影」「猿飛」「月影」「浮舟」の名あり、「松風」「覧行」「花車」あり、位詰に「逆風」「高浪」等の奥儀がある。即ち山の影を利して姿をかくすが「山影」、水辺の月の反映で敵の目を欺くが「月影」であり、「猿飛」は猿の如く梢を移って姿を消す。舟の陰に忍び泳ぎをするのが「浮舟」である。「松風」は名の

如く釜の湯のたぎる音に紛れて忍び入る。元は即ち悉く忍者の術から出た名である。『陰流』とは忍術の別称である。

次に、二代将軍秀忠が薨じた時、徳川幕府の礎は未だ固まらず、雄藩の中には密に国許に軍を構える不穏の気配があった。このとき家光は若年だったが、一日、江戸城に諸大名を集め、我に弓引く下心ある者は遠慮なく国許へ立帰れと下知した。先ずこれで諸大名は胆を冷やした。ついで家光は別室に大名の一人一人を招じ入れ、手ずから銘刀を餞けして、「末長く我に忠勤を励んでくれい」と手渡した。室内には他に人影もない。一対一である。贈られた短刀を逆手に把って突刺せば、忽ちに天下は変わる。然も家光は従容と刀を与える。

各大名は先ず其の胆力に畏怖した。次に己れにかけられた信頼の篤さに感涙した。上に叛く者あらば将軍の出馬をまつ迄もなく此の某がと、刀を押し戴いて忠誠を誓った大名もある。家光の信望は頓に高まり、一代の名君と仰がれ、実に幕府の基礎は茲に至って固まったのである。

だが、はからざりき、この室の天井並に襖の影に宗矩配下の心得者が潜み匿れていた。大名が脇差を取らんとせんか、忽ち心得者の手裏剣はその胸を刺したろう。或いは吹矢が飛んだろう。大名とて武技に心得はある。匿れた者の存在を察する位の達者も中にはいよう。然も一人として之を見破れなかったから、家光は大芝居が打てたのである。——然らばそれ程美事に身を匿せる者とは何者？　明らかに忍び者である——

又、柳生十兵衛三厳の行跡を見ても分かる。十兵衛は寛永三年十月二十歳の時から、三十一歳迄の十一年間「君の御前を退いて私ならず山に分け」入った。実は隠密だった。剣の達人だったから隠密にのぞまれたと人は言う。もう、だがその真の理由を説明する要はあるまい……

浮月斎の語気は、ようやく熱をおびてくる。評定所に当てられたのは唐津城内本丸の大広間である。家老の平野内記以下、家臣は浮月斎を含めて二十六名詰めているが、誰一人、声を発する者もない。柳生が忍びに通じているなら、公儀に於て寺沢家の企みを見抜いたというのは真であろう。堅高の自刃は最早のがれ得ない命運とはなったのである。

「——浮月斎」

その当の堅高が、浮月斎の話の途中で、不意に言葉を挟んだ。実は堅高は柳生が忍者と聞いた時から、もう諦めきって虚ろに家臣の一人一人の容貌を見ていたのである。——が、ふと不審が湧いたから彼は気持を取直し、浮月斎へ呼びかけた。

「もうよい、その方が申し状は、しかと分かったぞ。……併し、同じ柳生を忍びと見破るからは、其方とて多少の心得はあることか」と尋ねたのだ。

「御意」

浮月斎は低く答えて、懐中から何やら巻物を取出そうとした。——その時、

「く、曲者。各々方、くせ者でござるぞ」

廊下の外でパッと襖を倒す物音がした。

霞の忍者

襖を蹴倒した曲者は柿色の装束に身をかためていた。即ち忍術者だった。普通、忍び者は覆面に鎖帷子を着込んでの黒装束と思われがちだが、実は表が柿色で、裏は鼠色の衣裳を用いる。けっして黒衣は使わない。昼間は柿色がマギレ易く、夜間は鼠色の方がわかりにくいからである。

評定所に詰めていた家臣が曲者のその装束を見て、極度に狼狽したのは当然だろう。浮月斎の説は余りに早く証拠づけられた。唐津城は、もともと松浦川の河口の尖端に在り、北は海に面し、海水を取り入れた濠が城郭の四囲をめぐって流れている。従って城全体が海に浮かんだ巨大な建物の感じである。城から背後の陸地へ出るには大手門の橋を経て、京町口その他三個の橋を渡らねばならぬ。この日は公儀に内密の評定があるというので、橋口の警固は常になく厳重だった。曲者は白昼、その警固の目を掠めて忍び入ったのである。言い代えると、表廊下の片隅に潜み隠れていた曲者を発見出来るのは、浮月斎が作礼山から伴れて来た従者しかなかった。

従者は、名を霞千四郎といい、元は捨児である。肥前国に見借の里という処がある。むかし唐津郡に土蜘蛛と呼ぶ盗賊があり、兇暴の振舞いが多かったのを、たまたま景行天皇の熊襲征伐に陪従した大田屋児が派遣されて、誅滅した。その時カスミ四方に立罩め、物のあやめも分かち難かったので、以来名づけてカスミの里と呼ばれている。――或日のこと、身分いやしからぬ婦人が、此処に辿り来て男子を分娩した。婦人は鬼子岳城に亡んだ波多氏の家老・川添監物の娘であると名乗って息をひきとった。あとに嬰児が残ったのを、山田浮月斎は拾い上げて手許に育てた。それが霞千四郎である。

浮月斎は評定所に入る前に、番頭津田六郎右衛門まで右の霞千四郎を自由に庭前に徘徊させて呉れるようにと申出ている。予め、それだけの用心をして、浮月斎は評定の場に臨んだのである。だから忍者の闖入など浮月斎にすれば、さして驚く事ではなかったに違いない。

併し、曲者は、予想以上に腕が立った。

「おのおの方、……出会われい！」

廊下を喚き呼ばわって跡を追う番士の一人を、北ると見せて矢庭に身を返し、曲者は中指一本で番士の喉を突いた。襖を蹴ったのは、この身を返す反動をつけた時である。番士は喉に深さ一寸の穴を明けられ血を弄いて昏倒した。曲者は次の寄せ手の殺到するのを素早く見取ってサッと評定所の大広間に走り込んだ。列座の家臣は一斉に畳を蹴立った。

池田三郎兵衛ほか数人が主君堅高の前を庇う。他の者は小刀を抜放って曲者に詰寄る。曲者ははじめて大刀を抜いて、広間に仁王立となった。

覆面で目しか見えないが、太い眉の張った存外若い武士である。忍びの術とは別に武芸の心得も充分にあるらしく、死ぬ覚悟を決めたか、もう、落着いている。上段の堅高を見遣って、「当家の陰謀は、悉く江戸表にて御承知じゃ。兵庫頭どの、覚悟致されよ」と言い放った。その声のおわらぬ裡に、挑み掛っ

た歩行頭三島権大夫は袈裟に一刀を浴び、血煙りを立てた。彼を取囲んだ家士らは思わず一、二歩退いた。曲者は猿臂を延ばして更に二人目を斬った。此の頃まで、敵が踏込んだ時から正坐を崩さなかった浮月斎が、静かに起ち上がって家臣を押し除けて、曲者の前に出た。

「おお、浮月斎じゃな」

叫ぶや、忽ちに曲者は身を躍らせて欄間へ飛び上がっていたのである。そうして叫んだ。

「わしは此の場に果てるやも知れぬが、浮月斎、お主が懐にある武芸帳は、かならず、我が組の手に奪い取って見しょうぞ」

と叫んで、孔雀の透彫のある欄間を打破り、どうと向こう廊下へ墜落した。浮月斎の手を放たれた鉄扇が眉間を割ったのである。

一度騒然となった大広間が、忽ち水をうった如くに静まる。曲者の亡骸は、主君の目を憚って警士の手で運び去られた。

終始座を立たなかったのは堅高唯一人である。再び、家臣がそれぞれの席に戻って列座すると、併し誰よりも堅高の顔が蒼白になっていた。

「浮月斎、あれが柳生の者か」

と堅高は重問した。黙って浮月斎はうなずいた。

後刻、評定が了ってから人々は霞千四郎の姿を尋ね探したが、不思議と城内には見当らなかった。

夕　姫

ななめに傾いた月が彦岳に沈むにつれて、山すそ一帯に、巨きな蜘蛛の脚が延びるように影がひろがってゆく。落日を浴び、あかね色を映していた彼方此方の民家の白壁は、次第に色を変じて夕闇の気配を深める。深まったそんな薄闇の所々から竈の煙りが、糸々と立昇りはじめる。

ここは肥前国佐賀郡西山田ノ庄。のどかな春の昏れようとする寛永十二年四月のことである。唐津城の評定から、十二年前に話はさかのぼる。——

佐賀街道を北にとって、西山田のこの村落に入るあたりを土地の者は「川上」と呼んでいるが、その川上の、農家のまばらな辺りで、一人の武士が斬られて死んでいた。何処かの藩士らしく、旅の身扮でうつ伏せに大地へ伏し、死顔に大して苦悶のあとのないのは、余程の達人が斬ったからに相違なかった。

死骸のある位置から、更に北へ数歩はなれた所には、これは血の附いた巻物が一本、落ちている。落日の余映をうけ、巻物の金糸の刺繍がキラキラ光っている。あたりを通る者もなく、附近の柞の林がさわさわ風に騒ぐと、葉洩れの影に蔽われて時時、金糸の反映が乱れる。

最初に、この巻物に近寄ったのは、西山田の百姓孫六方に飼われていた五郎と呼ぶ犬である。五郎は何処からともなく遣って来て、先ず武士の死骸に近づき、その疵口の血を舐めると、嗅覚に誘われて地に鼻をすりつけるように巻物に寄って行った。犬には咬え持つ習慣がある。五郎は少時巻物の臭いをかいで、歯と歯に巻物を挾もうとした。刹那、奈辺ともなく飛んで来た手裏剣が眼を刺し通した。柄が隠れるほどに通った。五郎

は悲鳴を一声吠えて、虚空にくるりと一回転して息が絶えた。

すると。

柞の木影から、微びやかに立現われた姿がある。丈なす黒髪を背に垂らし、身辺に妙な伽羅の香を匂わしている。彼女はあたりの気配をうかがって、すうっと風のように身軽く巻物の傍へ寄った。そうして拾い上げようと身を屈し、延ばした手をぎくっと痙攣させた。弾かれた様に女は立ち上がった。

道幅を距てて、向こうにも黙々と人影が彳んでいたのである。

年齢、容貌ともに見分け難いが、山男かと見紛う人物。異様な臭気が薄闇に立罩めるのは沐浴をしないからであろう。襤褸を纏って、毛深い脛をむき出している。跣である。

女人は素早く胸に手をやって身構えた。懐剣を呑んでいる。男が挑めば抜かんずの気概で、相手を睨みつづける。眦の反りの深い、らんらんと薄闇に光る猫の眼である。それでいて、仄と闇に浮き上がった白い面は凄艶な迄に美しい。

「……おぬし」

男の方から一歩出て、声をかけた。

「武芸者の娘か？」

「——」

「かくすな。先刻の小柄の手並、まさしく柳生の手練と見た。申されい。おぬしが身分を明かすなら、その巻物、事と次第では譲って進ぜる——」

「何者じゃ、そなた」

「おぬし同様、さる筋に依頼されて、巻物を狙う一人。……が、誤解するでないぞ、武士を斬ったは、儂ではない」

言いながらヌッと又、ふみ出した。まるで警戒心のない、隙だらけな身の動かし方である。それでいてぼう漠とした不思議な妖気が身辺に漂っている。女は胸を張って、つま先立った。

「わしは、先刻から見ておった。武士を斬ったは片目の旅の牢人じゃ。あれだけ業の早いめっかちの男、ざらにはあるまい。柳生十兵衛、と儂は見たが……」

「——」

「おぬし、同じ柳生の太刀すじを持ちながら、十兵衛とは、面識はなさそうじゃな。申されい、まこと柳生の一味か？」

「……」

こたえるかわりに女の右手が胸の前で上下した。

「危い」

男は身を潜めて横っ飛びに道を躍り越える。手裏剣には加速度が伴わねばならぬ。そうでなくては深手を与え得ない。だから第二の小柄を防ぐには、身を近づけるに限るのだ。男は機敏に女の手許へ駈け寄った。

女の体が、宙に一回転した。黒髪が風を巻いて箒のように地を払い、その髪の先は男の瞼を搏った。ハラハラ柞の葉が男の肩に舞い降った。枝が大揺れに揺れ、もう、女は梢に乗っている。

「わらわは如何にも、十兵衛殿と未だ手合せはしてはおらぬ。なれど柳生者ではありませぬ。そなたに、その巻物、今日は譲りまする。されば男らしゅう名を名乗ってくりゃれ。……」ぶらんぶらん両手で枝にぶら下がっている。

「霞多三郎……おぬしは？」
「夕姫」
すき透るような凜とした声が降った。その時には、女は普通の郷士の娘の身扮をしていたが、白い眼を一文字にパッと開いて、柞の幹を蹴った。深い夕闇に次第にざわざわ梢の騒ぐ音が遠のいて往った。
迹に残った男は、猫背になって、凝乎と耳を欹て、去る音を聞き入る。この用心深さには忍び者の本性があらわれている。それにしては、併し、男の体臭はくさい過ぎ、身に武器を一物も附けていない。忍者は元来、臭気に対して異常な迄に関心を払うものだ。如何に音を忍んでも、目を紛らせても、人間の嗅覚を裏切れぬ事を了知しているからである。男が沐浴をせぬのは、だから忍びの術を心得ていて然も忍びを活用する必要には、せまられていない事を意味すると見ていい。それとも、故意に忍者であるのを紛らせる為か？
女の遠のいたのを確かめて、彼は、巻物はその儘に、悠っくり武士の死骸へ寄って行った。もう日は全く暮れきって、闇の思いがけぬ近さに農家の灯が点り出した。
「おぬし、鍋島藩の隠密かい？」
独りごちて無慈悲に死人の頬へ跣の足をかけ、ぐいと顔を向けかえた。
さて身を蹋め、見覚えのある顔かどうかをたしかめる。
「ふん、矢張り鍋島じゃな」
男は身を起こした。いつの間にか死人の印籠を捥り取っている。
それを懐中に、巻物へ戻って、象牙の白い牙軸の一端を摑んだ。指に血の附くのを嫌ったのだろう。
男は、其処で、巻物を披くではなく再びじっと、利き耳をたてだした。
闇の彼方から引返して来る跫音がある。女ではない。大跨に、しっかり大地を踏んでいる。
「……十兵衛か？」男は独りで呟いた。
緩慢な歩度の割には吃驚する程、その近づき方が捷い。
向こうも、あきらかに男の存在を察知している。この暗闇でそこまで目の利く相手とあっては、逃げてみても無駄である。
男は片手に巻物を摑み持って、のっそり道の中央に立って、近づく相手を、待った。

「お帰りなさいませ」
鼻を撮まれても分からぬ暗夜に、微び足で、疾風の如く駈け戻って来た夕姫を草庵の内から、手燭を提げた老女が迎えに出た。
「随分と遠出をなされましたな。お案じ申しました」
老女の後から跟いて出た武士が、これはその場に片膝を屈して、手をつく。うなじの髪に矢張り白いものが混っている。
夕姫は手燭の明りの眩しさに馴れるため、目を細めた。川上から四里半のこの蛤岳まで、山峡の夜道を彼女は背の髪が水平になびく速さで駈け戻って来た。然も、忍び者は呼吸づかいを荒々しくさせてはならぬ。夜目が利かねばならぬ。
草庵の中に夕姫が這入ると、背後から老女が手燭を持上げ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook